

子どもの自然・社会体験の変容と現状に関する分析

An Analysis of the Conditions and Changes of Child Experiences with Society and Nature

渡部 芳栄 (高等教育推進センター)

Abstract

The purpose of this paper is to conduct an inquiry into what will be of import in activities concerning natural and social experience - considered to be of chief importance in scholastic development for "new abilities" such as will, interest, and attitude - by clarifying the characteristics of the changes thereof.

The study utilizes data from the National Institution for Youth Education to calculate "Experience Scores" for use in the analysis. Experience Scores from before entering elementary school, from the lower grades, and from the upper grades in elementary school were set against each in other in order to find relationships as well as overall trends.

The analysis yields the following results: 1. There is not much natural or social experience before elementary school. 2. There is more natural and social experience before elementary school in the younger generation, and upon entering school the differences between individuals are smaller. 3. Middle school students and those in their 20s do not have very active social or natural experiences in elementary school. 4. Those with lots of natural and social experiences at one level tended to also have a lot in the next. 5. Those above their 20s (especially 40s and up) shows an increase in natural/social experience after entering elementary school regardless of their point status before entering it. 6. The young generation (particularly high school juniors to those in their 30s) has fewer natural and social experiences in the upper grades in elementary school. 7. There is a tendency in the young generation for those with few natural and social experiences to have even fewer going forwards.

For the children who are getting fewer natural and social experiences during early periods, we must consider making devices that either increase such experiences or serve as an alternative. There is also a need to more deeply analyze the relationship between such experiences and the cultivation of abilities and talents.

キーワード：自然体験, 社会体験, 新しい能力, 子ども

1. はじめに

高等教育の世界において、「コンピテンシー」「学士力」「汎用的能力」「就業能力」「社会人基礎力」「就職基礎能力」などの＜新しい能力＞の考え方が普及している。他方、初中等教育においても「PISA リテラシー」「キー・コンピテンシー」「生きる力」「人間力」などといった言葉が用いられてきた¹⁾。また、2014年に出された中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」（高大接続答申）以降の一連の高大接続改革は、それまで主に初中等教育にて使われていた「学力の三要素」（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」）を、大学教育・入試にまで意識させることとなった²⁾。なお、学力の三要素は「確かな学力」の要素の1つであり、さらに「確かな学力」は上述「生きる力」の要素の1つとなっている。

これらの学力観をめぐる近年の流れは、＜新しい能力＞の評価の難しさを示していると同時に、＜新しい能力＞が学校教育（特に高等教育段階）ですぐに身につけられるものではないことも示している。学力の三要素のうち、「主体性・多様性・協働性」については、上述の高大接続答申においては「知識・技能」が基礎にあり、「思考力・判断力・表現力」を基盤として養うとされている。しかしながら、志水（2005、第1章）が提示した「学力の樹」によれば、「知識・理解・技能」（A 学力）、「思考・判断・表現」（B 学力）、「意欲・関心・態度」（C 学力）は、この「三つの学力が一体となって、ひとつの学力の樹を形作っている」（p.39）一方で、「おそらく最も大事な部分は、「根っこ」である」（pp.47-48、C 学力のこと）という。初等教育（あるいは就学前）から高等教育（あるいは生涯）に至るまで、3つの学力は常に行ったり来たりしながら、バランスをとって育成する必要があるのと同時に、時系列的に言っても、早い段階（初等教育、あるいは就学前）において身につける必要がある学力が「意欲・関心・態度」（C 学力）ということになる。もちろん高等教育段階でもそれらの育成のしかけを作ることできるが、学校教育にとどまらず、家庭教育や学校外教育などの多くの経験・体験、しかも早期から育成されるべきものであると思われる。

「PISA リテラシー」や「生きる力」などの言葉が使われるよりも早く、新しい学力観を盛り込んだ学習指導要領改訂（1989年）ののち、文部省（当時）は、段階的に学校週5日制を導入し、「学校、家庭、地域社会が一体となってそれぞれの教育機能を発揮する中で、子どもたちが自然体験や社会体験などを行う場や機会を増やし、豊かな心やたくましさを育て」ることを目指してきた³⁾。その後も、「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ（答申）」（生涯学習審議会 1999）、「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」（中央教育審議会 2013）など、生活（社会）体験・自然体験を重視する政策・答申が出されてきた⁴⁾。これらは、「生きる力」などの＜新しい能力＞の一部を育成する機会として、学校教育以外の自然体験や社会体験（以下、自然・社会体験）が重要であることを示している。

そこで本稿は、＜新しい能力＞や学力の三要素（特にその「根っこ」となりうる「主体性・多様性・協働性」）の育成にとって重要と考えられる子ども世代の自然・社会体験活動が、従来からどの程度行われており、またどのような変化をたどってきたか、その結果どのような現状となっているのか、その特質を明らかにし、実践上・研究上における今後の課題について考察することを目的とする。

2. 先行研究と本稿の分析方法

(1) 先行研究の知見と調査研究上の課題

子どもの自然・社会体験を量的に捉えることは調査対象の選定、実施にかかる費用などの面から容易なことではないが、これまでいくつかの調査研究が行われてきた。例えば、野垣（1993, p.41）に紹介されている『横浜市，児童・生徒の日常生活に関する調査』の「あなたは今の学年になってから、次のようなことをしたことがありますか」という問に対する回答結果を見て、野垣氏は「一見して、自然体験がいかに貧弱であるか、ということが知らされる」（p.41）と嘆いている。そこでは、木登りや昆虫・植物採集、友だちとのひみつの場所を持つなどの経験が今の学年になって一度もない子どもが、3分の1から過半数存在している姿が明らかになっている。

また、2005年度に文部科学省の委託調査で行われた「地域の教育力に関する実態調査」では、平日の放課後や休日において「テレビを見る、マンガ・雑誌を読む、音楽をきく」「テレビゲーム、携帯ゲームをする」などの活動は多い一方で、「地域の行事に参加する」「グループ活動に参加する」などの活動は少ない実態が明らかになっている。また、子どもが過ごす場所については「公園、原っぱ、空き地」「海、山、川などの自然」ではなく、「自分の家」や「友だちの家」などの屋内で過ごす実態が明らかとなり、「子どもの活動は屋内が中心」とまとめられている⁵⁾。

青井（2010）は、松山市・松前町の幼稚園幼児の保護者に行ったアンケートをもとに、平日の過ごし方、遊び場や遊び相手、みちくさの状況などを明らかにしている。幼児にきょうだいがいる場合には、「近隣に幼児の遊び友だちを求めないということを予想」（p.53）させる結果が出ているなど、興味深い調査となっている。しかしながら、以上の調査研究は調査対象人数が少数であったり、調査地が特定の場所に偏っているなどの調査上の課題が存在している。

それに対して、日本子ども社会学会による「子どもの全国放課後調査」、独立行政法人国立青少年教育振興機構による「子どもの体験活動の実態に関する調査」では、調査対象を全国から抽出し、サンプルサイズも大規模なものである⁶⁾。日本子ども社会学会の調査結果については、深谷・深谷・高旗編（2006）において2章10節にわたって詳細に説明がなされている。特に第1章第5節では地域差について検討するなど、他の同様の調査では明らかにできなかった点に迫るなど、多方面において詳細に検討がなされている。しかし、「子どもの放課後の生活実態を明らかにする」（同書, p.4）という調査目的であるため仕方がないものの、自然・社会体験の全体像がとらえられるわけではない（勉強時間や外遊びの種類など多方面で尋ねているが、例えば地域で大人との接する機会などの観点は含まれていない）。

独立行政法人国立青少年教育振興機構の詳細な分析・検討結果は、報告書及び資料編としてまとめられている。当該調査は、「子どもの頃の体験と大人になった時の資質や能力の関係について検証」する点や「子どもの頃の体験の年代間比較」（独立行政法人国立青少年教育振興機構編, 2010, p.5）が可能である点において、一際優れている。調査は体験の種類として「自然体験」「動植物とのかかわり」「友だちとの遊び」「地域活動」「家族行事」「家事手伝い」（6 カテゴリー×各5項目、計30項目）を尋ねると同時に、体験の力の種類として「自尊感情」「共生感」「意欲・関心」「規範意識」「人間関係能力」「職業意識」「文化的作

法・教養」(7 カテゴリー×各5項目、計35項目)などを尋ね、それらの関連を分析している。その結果、年齢期別にどういった体験がどういった力に結び付いているかを明らかにしている。ただし、体験の種類(及び体験の力)について上記各カテゴリーごとに調査・分析しており(もちろん、仮説を検証する目的で行っている調査であるため妥当である)、自然・社会体験の全体像のようなものが明確であるわけではない。

(2) 本稿の分析方法

本稿で関心を持っているのは特定の体験というよりも、子どもたちの自然体験や社会体験(以下、自然・社会体験)の全体像がどのように変わったのかである。先行研究は特定の側面に焦点を当て、調査・分析しており、それぞれ明確に知見が得られているものの、「それでは一体、子どもたちの自然・社会体験は全体としてどうなったのか」「どういった人が時系列的に自然・社会体験を増やしたり、減らしたりするのか」といったことが今一つ判然としない。もちろん、全体像というものをどのようにしたら捉えられるかという点については、大きな課題として存在する。現在の子どもたちの状況であれば、何らかのアンケートやインタビューを実施することで全体像をとらえることは(技術的には)可能かもしれない。しかし、実際にはサンプリングの問題や予算面での課題が存在する。

表1 機構調査の対象者と回収数

	対象者	回収数
青少年調査	小学校5年生	2,860
	小学校6年生	2,830
	中学校2年生	2,480
	高校2年生	2,844
成人調査	20代	1,000
	30代	1,000
	40代	1,000
	50代	1,000
	60代	1,000

そこで本稿では、前項の最後にレビューした独立行政法人国立青少年教育振興機構の調査(以下、機構調査)で得られた個票データを用いて、子どもたちの自然・社会体験の全体像の特質や変容を検討する。機構調査は、小学校高学年から高校生までの青少年約11,000人を対象にした「青少年調査」と、20代～60代の成人5,000人を対象とした「成人調査」の2つで構成されている(表1)。2つの調査は対象者の人数のほか、抽出方法や調査方法においても異なっており、単純な比較は難しい⁷⁾。また、実際の行動というより、認識(主観)レベルの回答(年代が上がるほど回答の妥当性に問題が生じる。)であることや、年代が下がるほど学校教育(幼稚園等も含む。)によって取組まれているものも多くなる可能性もあるなどの問題もある。しかし、本稿で着目する自然・社会体験をはじめ調査全体のほぼすべてにおいて同じ項目を用いて実施しており、両データによって分析・比較検討する。ただし、

本稿で確認する全体的な傾向（全データを使った分析）については、サンプルサイズの大きい青少年調査からの影響が大きいことはあらかじめ断っておく。

本稿で使用する自然・社会体験は、機構調査で尋ねられた以下の20項目である。

機構調査での分類	質問文
自然体験	海や川で貝を採ったり，魚を釣ったりしたこと
	海や川で泳いだこと
	太陽が昇るところや沈むところを見たこと
	夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと
	湧き水や川の水を飲んだこと
動植物とのかかわり	米や野菜などを栽培したこと
	花を育てたこと
	ペットなどの生き物の世話をしたこと
	チョウやトンボ，バッタなどの昆虫をつかまえたこと
	野鳥を見たり，鳴く声を聞いたこと
友だちとの遊び	かくれんぼや缶けりをしたこと
	ままごとやヒーローごっこをしたこと
	すもうやおしくらまんじゅうをしたこと
	友人とケンカしたこと
	弱い者いじめやケンカを注意したり，やめさせたこと
地域活動	近所の小さい子どもと遊んであげたこと
	近所の人に叱られたこと
	バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと
	祭りに参加したこと
	地域清掃に参加したこと

上述のように、個別項目の基礎集計については、報告書にて詳細に掲載されている⁸⁾。本稿で確認したい「子どもたちの自然・社会体験の全体」については、機構調査にて「自然体験」「動植物とのかかわり」「友だちとの遊び」「地域活動」と区別されている上記20項目を一括し、「何度もある」を2点、「少しある」を1点、「ほとんどない」を0点として、その合計点を全体像（全体状況）を表す「経験得点」として算出した（40点満点）。もちろん、この20項目で全体を把握しきれるとは言い切れないが、これまでとらえてこなかった自然・社会体験の全体像を試みに捉えなおしたい。

機構調査では、小学校に通う前（幼稚園や保育園等）、小学校低学年（1～3年生）、小学校高学年（4～6年生）、中学校の4つの時期について尋ねているが、調査対象によっては

回答ができない「中学校」を除く3つの時期に着目する（以下、それぞれ「入学前」「低学年」「高学年」と記載する）。第3節では、入学前・低学年・高学年の各段階で経験得点が全体として高いのか低いのか、高くなったのか低くなったのか、年代⁹⁾によってその全体像に違いがあるのか、などを捉える。第4節では、前段階の経験得点の高低と次段階の経験得点の高低に関連はあるのか、また変化の仕方はどういう特徴が見られるか、年代によってその傾向に違いがあるのかどうかなどの点を分析する。第5節では分析結果をまとめ、実践上・研究上における今後の課題について考察を行う。

3. 時期別に見た自然・社会体験の多寡

(1) 全体的な傾向

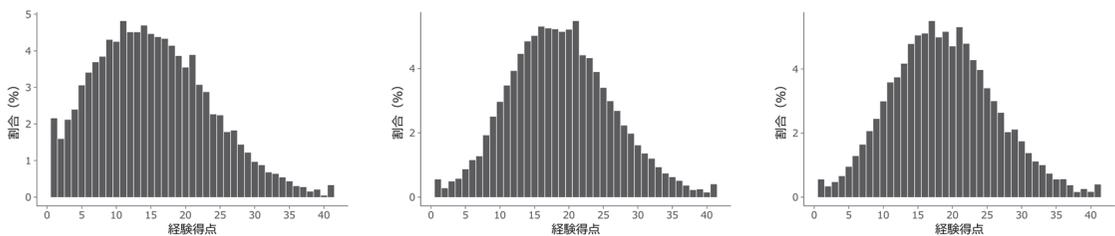


図1 時期別に見た経験得点の分布

表2 経験得点の記述統計量

	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値	歪度 ¹⁰⁾	尖度 ¹¹⁾
入学前	14.3	8.15	14	0	40	0.45	-0.19
低学年	17.8	7.39	17	0	40	0.26	-0.07
高学年	17.8	7.48	17	0	40	0.24	-0.12

自然・社会体験の経験得点ごとの分布（割合）を、時期別に見たものが図1であり、各記述統計量が表2である。図を見ると、入学前については左のほうに偏っている（右裾が長い）形に見え、低学年・高学年になると真ん中に近づいているようである。すなわち、入学前はまだまだ多くの方がそれほど多くの自然・社会体験をしておらず、入学後に増えるということがわかる。

記述統計量を見ると、入学前には平均値が14.3と半分（20点）を大きく下回っており、やはり歪度も0.45と相対的に大きな正の値となっている。低学年になると平均17.8と高くなり、歪度も0.26と低下している（右裾が長いという分布の歪みが、いくらか解消されている）。標準偏差も小さくなり、尖度はややプラスの方向に向かっている。すなわち、入学前にはやや大きかった体験が多い人と少ない人の差が、入学後には小さくなるということである。入学前には家庭環境や住んでいる地域環境などが影響して、差が大きく出ていたのかもしれない。

高学年になると、平均値は低学年時と変わらない一方で、標準偏差は少し大きくなる。わ

ずかな差ではあるが、高学年になると再度差が広がっていくということを意味する可能性がある。歪度は小さくなりつつ、尖度はややマイナスの方に向かう（扁平な形に近くなる）。やはり、人によって体験の量の差が広がるような傾向を示している。

(2) 年代別の傾向の違いについて

入学前の経験得点について、年代別に見たのが図2であり、記述統計量が表3である。表1で見たように、対象によってサンプルサイズの大きさに差があるため、これ以降に記載する世代ごとの記述統計量（特に標準偏差や歪度・尖度等）については、厳密な意味での世代間の比較は難しいことは注意が必要である。

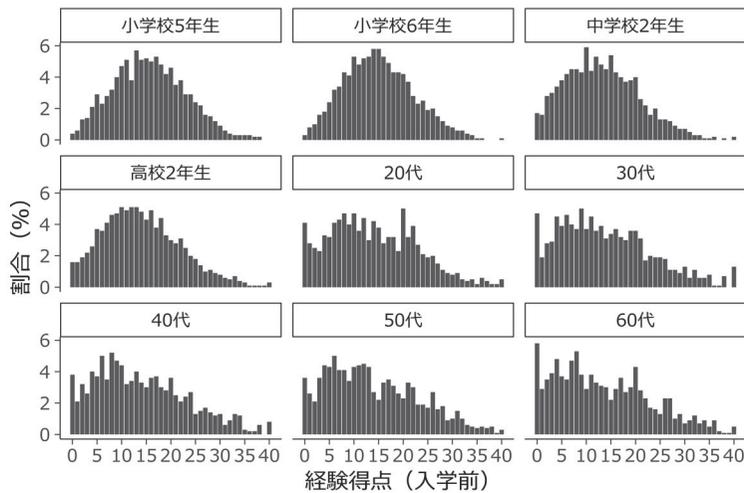


図2 年代別経験得点（入学前）

表3 年代別経験得点の記述統計量（入学前）

	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値	歪度	尖度
小学校5年生	15.7	7.33	15	0	38	0.26	-0.30
小学校6年生	15.1	7.05	15	0	40	0.36	-0.21
中学校2年生	13.2	7.48	13	0	40	0.48	-0.07
高校2年生	14.1	7.84	13	0	40	0.51	-0.03
20代	14.1	8.88	13	0	40	0.46	-0.34
30代	13.9	9.33	13	0	40	0.63	-0.15
40代	14.1	9.32	13	0	40	0.56	-0.37
50代	14.0	9.24	12	0	40	0.53	-0.50
60代	13.5	9.55	12	0	40	0.54	-0.53

図を見ると、年代別の分布の形はかなり異なっているように見える。まず目につくのは、年齢が高い世代の分布が左のほうに偏っている（右に裾が長い）ことである。60代にいたっては、直角三角形のようにすら見える。ただし、成人調査の対象である20代以上について

は分布をみても得点が0であるケースが相当程度存在していることには注意が必要である（60代では、5.8%が得点0である¹²⁾）。

記述統計量を確認すると、まず歪度から上記のことが裏付けられる。すなわち、小学校5年生・6年生では相対的にゼロに近い値（偏りの小さい分布）を示している一方、30代の0.63をはじめ、40代～60代で高めの値を示している（右裾が長い）。中央値は高い世代のほうが低くなっており、若い世代のほうが相対的に自然・社会体験が多いことを示す（平均値を見ても、一部を除いてそれを裏付けている）。尖度については、中学校2年生と高校2年生で相対的に大きい値を示しており、尖った形に近い。また、成人調査の対象となっている世代では標準偏差が高く、広い範囲に分散していることも裏付けられる。

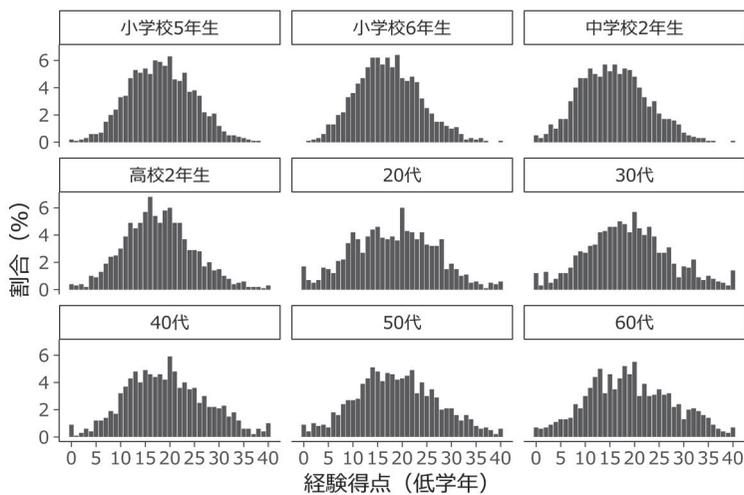


図3 年代別経験得点（低学年）

表4 年代別経験得点の記述統計量（低学年）

	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値	歪度	尖度
小学校5年生	18.2	6.49	18	0	40	0.14	-0.21
小学校6年生	17.2	6.44	17	0	40	0.28	-0.08
中学校2年生	15.8	6.86	16	0	40	0.30	-0.13
高校2年生	17.8	7.04	17	0	40	0.28	0.09
20代	18.2	8.35	18	0	40	0.06	-0.40
30代	18.8	8.42	18	0	40	0.21	-0.17
40代	19.3	8.10	19	0	40	0.22	-0.30
50代	18.8	8.29	18	0	40	0.14	-0.36
60代	19.1	8.59	19	0	40	0.16	-0.51

同様に、低学年経験得点の分布と記述統計量をまとめたものが図3及び表4である。図3を図2と比べると、どの世代も分布の偏りが小さくなっているように見える。ただし、年代

別には小学校5年生・小学校6年生・中学校2年生・高校2年生と比べて、20代以上のほうが広い範囲に分布しているように見える。

記述統計量を確認すると、歪度は0.06(20代)から0.30(中学校2年生)の間に収まっており、入学前の値よりはやはり小さくなっている。平均は小学校6年生～高校2年生（特に中学校2年生）でやや低いが、総じて30代以上の平均値が高くなっている上、40代・60代では中央値も19と高い。

尖度を見ると、高校2年生で0.09、小学校6年生で-0.08と相対的に大きな値となっており（尖った形となっており）、上述のような分布の状況を裏付けている。反対に、20代で-0.40、40代で-0.30、50代で-0.36、60代で-0.51と小さな値となっている（すなわち、扁平な分布の形となっている）。標準偏差を見ても、中学校2年生以下が6点台、高校2年生で7点台、20代以上で8点台と、徐々に大きくなっている。単純な比較は難しいことは再度繰り返すが、個人による自然・社会体験の度合いの差が、現代の子どもは昔より小さくなり、多くの子が同程度の経験をしていることを示しているのかもしれない。

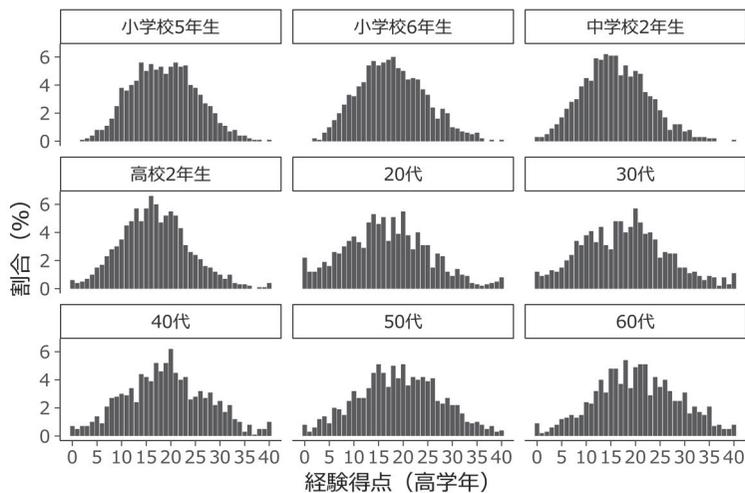


図4 年代別経験得点（高学年）

同様に、高学年経験得点の分布と記述統計量をまとめたものが図4及び表5である。高学年経験得点の分布については、低学年経験得点のそれと似ているように見える。つまり、高校2年生以下でより近い得点の中に分布しているように思われる。

平均値を見ると小学校5年生・6年生や30代以上でやや高く、中学校2年生・高校2年生・20代ではやや低い値を示している（低学年時は、小学校6年生～高校2年生で低い値となっていた）。真ん中の世代が、経験が少ない世代であったのだろうか。同様の傾向が、中央値においても読み取ることができる。

歪度に着目するとすべてプラスではあるが、50代・60代ではほぼ0の値（すなわち、正規分布に近い形）となっている。40代や小学校5年生でもやや小さい値となっているが、その他は相対的に大きな値となっている（多少左に偏りがある）。尖度を見ると、高校2年

生ではプラスの値（尖った形）となっており、中学校2年生で0に近い値となっている他は、マイナスの大きな値となっており、扁平の形を示している。標準偏差も20代以上で大きな値となっており、図の状況を裏付けている。

表5 年代別経験得点の記述統計量（高学年）

	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値	歪度	尖度
小学校5年生	18.7	6.63	19	0	40	0.16	-0.35
小学校6年生	17.8	6.72	17	1	40	0.28	-0.26
中学校2年生	15.9	6.65	16	0	40	0.30	-0.04
高校2年生	16.8	6.99	16	0	40	0.29	0.15
20代	16.7	8.51	16	0	40	0.24	-0.21
30代	17.8	8.64	18	0	40	0.24	-0.30
40代	19.1	8.32	19	0	40	0.13	-0.35
50代	19.1	8.35	19	0	40	0.05	-0.46
60代	20.3	8.40	20	0	40	0.03	-0.42

この節で得られた知見をまとめると、①全体としては小学校入学前には経験得点が低いものの、入学後には経験得点は上昇し、個人間の差（標準偏差など）が小さくなること、年代別に見ると、②入学前は若い世代のほうが経験得点が高いこと、③低学年時に個人間の差がどの世代でも小さくなるが、若い世代のほうが経験得点が平均化している可能性があること、④高学年でも低学年と同様の傾向が見られるが、中高生や20代で経験得点がやや低い値となっていること、などである。

4. 前段階が次段階に及ぼす影響

(1) 全体的な傾向

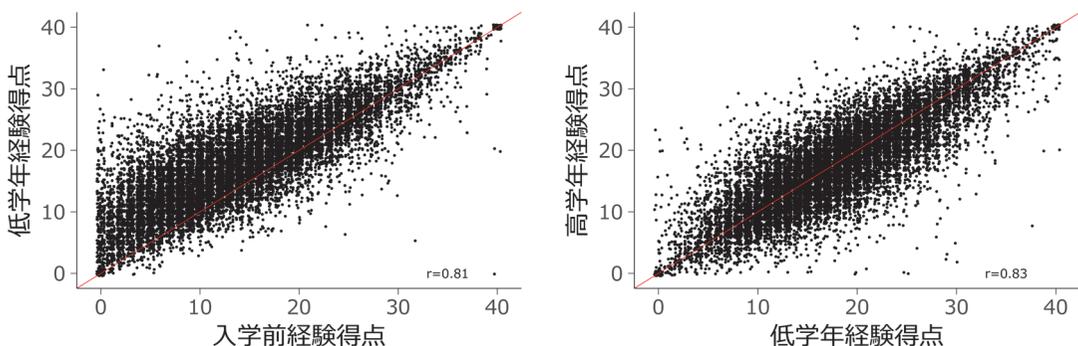


図5 経験得点の散布図

ここでは、前の段階の経験得点と次の段階の経験得点とでどのような関係があるかを確認する。

図5は、2時点間の経験得点の分布を散布図¹³⁾にて示しており（左は入学前経験得点と低

学年経験得点の関係、右は低学年経験得点と高学年経験得点の関係)、相関係数はそれぞれ0.81と0.83となっている。左図を見ると、 $y=x$ の補助線より上になるケースが多いことが見て取れる(低学年経験得点が入学前経験得点より下回ったケース数2,368に対し、変化なし(同点)1,619、上回ったケース数10,470と圧倒的に多い)。すなわち、入学前経験得点が何点であったとしても低学年時には得点が伸びるケースが多いということであり、事実、入学前経験得点が0(すなわち、入学前にはほとんど自然・社会体験を経験してなかったケース)であったとしても、低学年時にいろいろな自然・社会体験を経験しはじめる人が多いことを示す。

それに対して右図を見ると、より相関が強いことが見て取れる。相関係数の差はわずかであるが、右肩上がりの分布がはっきりしている。ただし、 $y=x$ の補助線より上になるケースも下になるケースも多い(低学年経験得点が入学前経験得点より下回ったケース数6,387、変化なし(同点)2,012、上回ったケース数5,968)。

そこで、前段階の経験得点別に、その後平均的にどのくらい変化したかを示したのが図6である。左は入学前経験得点別に低学年時の経験得点が平均してどれくらい変化したかを示したもので、右は低学年経験得点別に高学年時の経験得点が平均してどのくらい変化したかを示したものである。もともと得点が低かった群は大きく上昇し、もともと得点が高かった群は大きく低下するという傾向があるが、ここで注目したいのは平均変化がプラスからマイナスに転じている箇所である。入学前から低学年時の変化については、入学前経験得点が26点の群で0.41、同27点の群で-0.09と符号が変わっている。しかし、入学前経験得点が35点までは数値自体は大きくないため、もともと高かった群でもあまり低下しない(経験の度合いが落ちない)ことが分かる。

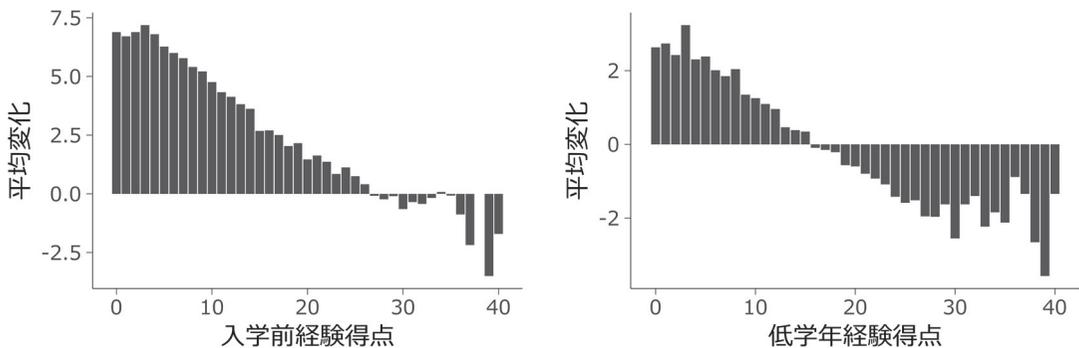


図6 前段階の経験得点別平均変化

低学年時から高学年時の変化については、16点付近でマイナスからプラスに転じている。すなわち、低学年時の経験得点が半分(40点満点で20点)以下であっても、高学年時には低下してしまうことが示されている。低学年時に経験得点が高かった人は高学年時にも高く、低かった人は高学年時にも低いという意味で相関は強いが、もともと高かった人が得点を大きく伸ばしたり、もともと低かった人が大きく減らしたりという意味ではなく、得点を伸ばした人も減らした人もいる。その中で16点付近というのが、一定の閾値のようなものとしてあることがわかる。

(2) 年代別の傾向の違いについて

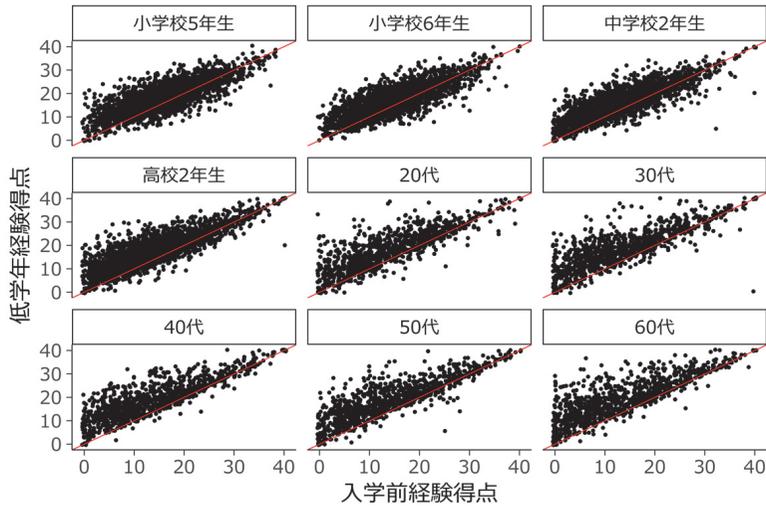


図7 入学前経験得点と低学年経験得点の散布図（年代別）

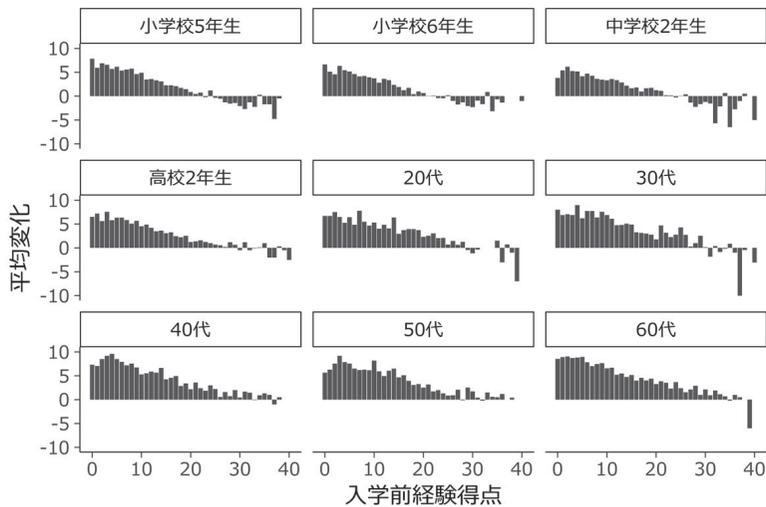


図8 入学前段階の経験得点別平均変化（年代別）

図7は図5左を年代別に見たものであり、図8は図6左を年代別に見たものである。散布図を見ると、小学校5年生～高校2年生までと比べて、20代以上の場合には入学前経験得点よりも低学年経験得点が上回るケースが相対的に多いように見える（ $y=x$ の補助線の上にプロットされるケースも、相当程度存在する）。図8を見ると、それと関連することがわかる。特に40代・50代については、入学前経験得点が高かったとしても、平均変化はほぼ0以上である（下回らない）ことが見て取れる。60代についても、もともと1人しかいなかった入学前経験得点39点の方が33点に低下した影響でグラフには大きなマイナスが見られる

が、それ以外はほとんど低下していない。これらから想像されることは、特に年配の方々については、小学校入学によって自然・社会体験が減少することはあまり多くはなかったということである。

また、平均変化の符号が変わるポイントは小学校5年生で23～25点付近、小学校6年生で21～24点付近、中学校2年生で24～27点付近、高校2年生で30～32点付近、20代で29点付近、30代で31～33点付近となっており、若年のほうが入学前経験得点が低くてもマイナスに転じやすい傾向が見られる。

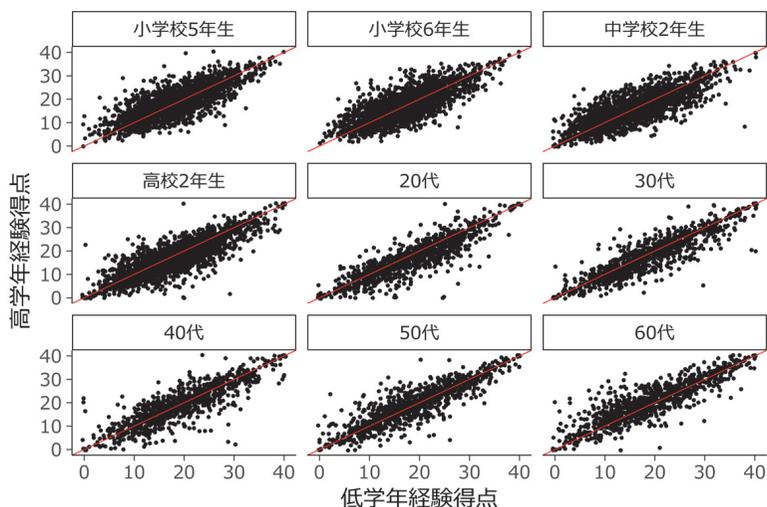


図9 低学年経験得点と高学年経験得点の散布図（年代別）

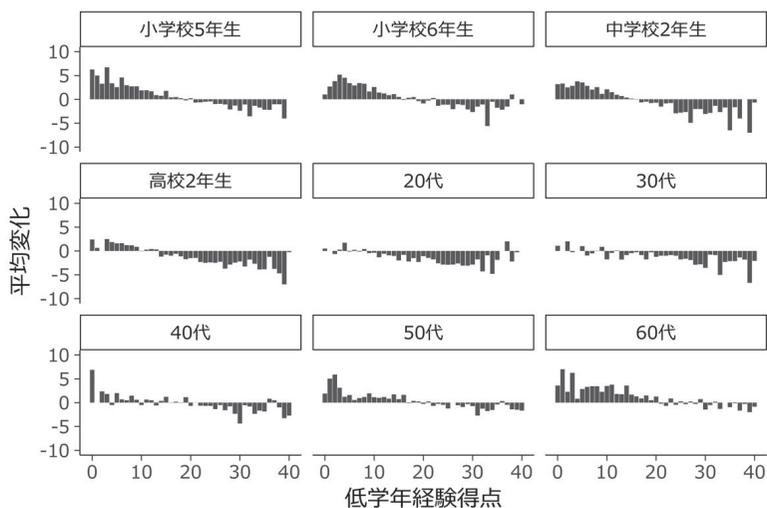


図10 低学年段階の経験得点別平均変化（年代別）

同様に、低学年から高学年への変化を年代別に見たものが図9及び図10である。図9を

見ると、今度はどの年代でも $y=x$ の補助線から下にプロットされるケースが多くなっていることが見て取れる。特に20代や30代については、補助線よりも下にプロットされているケースが多いように見える。図10を見ると、やはり20代・30代や高校2年生は低学年経験得点が低くても高くても、マイナスに伸びているのが目立つ。それに比べて50代・60代はマイナスになる群は多くないように見える。

また、平均変化の符号が変わるポイントは小学校5年生で19～21点付近、小学校6年生で16～19点付近、中学校2年生で16点付近、高校2年生で10～14点付近、20代で5～9点付近、30代で6～10点付近、40代で18～22点付近、50代で20～22点付近、60代で21～30点付近となっており、やはり若年（特に高校2年生～30代）において低学年経験得点が低くてもマイナスに転じやすい傾向が見られる。

この節では、どのような人が点を伸びしたり減らしたりするかを分析した。得られた知見をまとめると、①全体としては前段階の経験得点と現段階の経験得点とは強い相関関係があること、年代別に見ると②入学前から低学年時の変化については、20代以上（特に40代以上）で入学前の経験得点に関わらず経験得点を伸ばしやすいこと、③低学年時から高学年時の変化については、若い世代で経験得点を低下させる傾向があること、④経験得点の平均変化がマイナスに転じる箇所については、入学前から低学年時、低学年時から高学年時のいずれにおいても若い世代で低い得点になっており、マイナスに転じやすいこと、などである。

5. まとめと考察

本稿の目的に照らし、得られた知見を再構成すると以下のようにまとめられる。

まず、自然・社会体験は小学校入学前では多くはないものの、入学後には多くなる。年代別に見てみると、若い世代のほうが入学前の自然・社会体験が豊富に行われており、入学後には個人間の差も小さくなるようである。高学年時には、中高生や20代でやや少ない状況であり、高学年の時に自然・社会体験があまり活発ではなかった世代なのかもしれない。

次に、自然・社会体験の多寡が次の段階の自然・社会体験の多寡とどのような関係があるかを見たところ、全体的に自然・社会体験が多い人は次段階でも自然・社会体験が多い傾向が見られた。しかし年代別に見ると、低学年への移行に際しては、20代以上（特に40代以上）の世代は入学前にどれほど自然・社会体験が多いか少ないかによらず、入学後に自然・社会体験が増えていた。また、高学年への移行に際しては、若い世代（特に高校2年生～30代）で自然・社会体験が少なくなってしまうようであった。なお、低学年時の移行・高学年時へ移行のいずれにおいても、若い世代のほうで自然・社会体験がより少ない人でもさらに少なくなってしまう傾向が見られた。

以上の知見をもとに、実践上・研究上における今後の課題を考察する。自然・社会体験の推進が一定程度浸透してきたのか、小学校入学前については自然・社会体験が多くなってきているようであるが、その後小学校入学や高学年への学年進行によって、前の世代より早い時期に自然・社会体験を減らしてしまっている。独立行政法人国立青少年教育振興機構編（2010,p.10）によれば、本稿で扱った体験のうち小学校低学年時の「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」「地域活動」や、高学年から中学生までの「地域活動」「自然体験」が体験の力（の育成）と関係があるとしている。上記のように、高学年時には自然・社会体験が

減ってしまっているということは、その前段階の低学年の体験と高学年以降の体験（及び、関連する能力育成の機会）との両方を減らしている可能性がある。本稿では十分に分析しなかったが、現代の子どもたちは塾や習い事・スポ少等でその機会が奪われている可能性もある。それらが従来の自然・社会体験の代わりになるのかもしれないのか、その可能性を含めて、現段階では不明であるが、自然・社会体験を意図的に増やす試みをするか、自然・社会体験の代替となるような仕掛けを考えなければならない。

研究上の課題については、上述のように今回分析できていない塾や習い事・スポ少への参加の有無との関係や、能力育成との関連を再度分析する必要がある。塾等へ通っている子が自然・社会体験が少ないかどうかは、本稿では明らかにされていない。もしかすると、塾等も自然・社会体験も自由時間も充実させている子がいる一方で、まったく正反対の子もいるかもしれない。そうであれば、家庭状況や地域環境などの変数も考慮に入れなければならないだろう。

さらには、そうした自然・社会体験の多寡が、能力育成とどう関連しているかも検討しなければならない。機構調査では一定の仮説のもと、体験の種類と体験の力との関連を調べているが、現実の事象は「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」などのような個別的な体験の種類に関係なく、もっと総合的なものかもしれない。機構調査データを使用した追分析を継続する他、機構調査から10年近くたった現在はどうなっているかを明らかにする調査・分析も行う必要があるだろう。

注

- 1) いずれも松下編著（2010, p.i）参照。
- 2) 同答申では学力の三要素について、「(i) これからの時代に社会で生きていくために必要な、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」「(ii) その基盤となる「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」」「(iii) さらにその基礎となる「知識・技能」」としている。なお、学力の三要素自体は、2007年の改正学校教育法第30条第2項にすでに示されている。
- 3) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200101/hpab200101_2_123.html
（最終アクセス 2018/07/11）
- 4) 2002年中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」も、文部科学大臣諮問理由説明を見れば、これらの動きとまったく無関係ではない。
- 5) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/06032317/002/001.htm（最終アクセス 2018/07/11）参照。
- 6) 前者の回収数は第1回3,226人、第2回調査2,793人で合計6,019人、後者の回収数は青少年調査11,014人、成人調査5,000人で合計16,014人と、かなり大きな規模で実施されている。
- 7) 調査目的・方法等の詳細は、<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/62/File/10taiken-02.pdf>（最終アクセス 2018/07/11）に記載されている。
- 8) <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/62/File/10taiken-siryou-06.pdf>
（最終アクセス 2018/07/11）参照。

- ⁹⁾ 機構調査の対象に従い、小学校5年生・小学校6年生・中学校2年生・高校2年生・20代・30代・40代・50代・60代の9つの年代別に分析する。
- ¹⁰⁾ 左右対称の時に0、左に裾が長い時に負(-)、右に裾が長いときに正(+)の値となる。
- ¹¹⁾ 正規分布の時に0、扁平な分布の時に負(-)、尖った分布の時に正(+)の値となる。
- ¹²⁾ Web調査で行われた成人調査で収集されたデータについては、無回答が存在していない。調査上・集計上の課題の可能性についても、考慮に入れておいてもいいかもしれない。
- ¹³⁾ 重ならないようにジッターリングしているが、たくさん点が集まっているところは濃くなっている。

引用・参考文献

- 青井倫子, 2010, 「幼児の遊びと仲間たち」住田正樹編『子どもと地域社会』学文社, pp.41-59。
- 中央教育審議会, 2013, 「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」。
- 中央教育審議会, 2014, 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」。
- 独立行政法人国立青少年教育振興機構編, 2010, 『「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書』。
- 独立行政法人国立青少年教育振興機構編, 『青少年の体験活動等に関する実態調査』各年度報告書。
- 深谷昌志・深谷和子・高旗正人編, 2006, 『いま, 子どもの放課後はどうなっているのか』北大路書房。
- 株式会社日本総合研究所, 2006, 「「地域の教育力に関する調査」報告」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/06032317/002.htm
(最終アクセス 2018/07/11)
- 門脇厚司, 1999, 『子どもの社会力』岩波新書。
- 門脇厚司, 2010, 『社会力を育てる』岩波新書。
- 松下佳代編著, 2010, 『「新しい能力」は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—
ミネルヴァ書房。
- 日本子ども社会学会編, 1999, 『いま, 子ども社会に何がおこっているか』北大路書房。
- 野垣義行, 1993, 『生涯学習社会と子ども』第一法規。
- 柴田彩千子, 2014, 『地域の教育力を育てる』学文社。
- 志水宏吉, 2005, 『学力を育てる』岩波書店。
- 志水宏吉, 2014, 『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房。
- 生涯学習審議会, 1999, 「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ(答申)」。
- 住田正樹, 2001, 『地域社会と教育』九州大学出版会。
- 住田正樹・武内清・永井聖二編, 2010, 『子どもと地域社会』学文社。
- 住田正樹, 2014, 『子ども社会学の現在』九州大学出版会。
- 住田正樹・高島秀樹編著, 2015, 『変動社会と子どもの発達—教育社会学入門』北樹出版。
- 住田正樹他編著, 2015, 『変動社会と子どもの発達』北樹出版。